

キャラクター名
水嶋 湊(みずしま みなと)

プレイヤー名

シンドローム	ハヌマーン モルフェウス		ワークス	高校生	カヴァー	高校生
	オプション		年齢	16	性別	男
覚醒	忘却	衝動	闘争		初期侵食率	33 %
出自	安定した家庭	経験	ニュース	邂逅	いい人	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	31
肉体	2	1	2			5	行動値	7
感覚	3	0	0			3	(非装備時)	7
精神	1	0	0			1	戦闘移動	12
社会	2	0	0			2	全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	5		射撃			RC	2		交渉		
回避	1		知覚	1		意志	3		調達	4	
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	2	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
情報収集チーム	
手配師	
要人への貸し	
応急手当キット	
噂好きの友人	
メモリー:少女に貰った折り紙	
思い出の一品:お守り	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費
錬金術師	P	N		
幸せな日常	P 庇護	N 悔悟		
母親	P 憧憬	N 不安		
ジャーナリスト	P 好意	N 不信心		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 12 残り財産P: 4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
コンセントレイト:モルフェウス	2	2	Xジャー	-	-	対決	-	
効果: C値-Lv								
咎人の剣	3	4	Xジャー	-	-	対決	リミット	
効果: 条件《インフィニティウェポン》/攻撃力+[Lv*5]								
インフィニティウェポン	5	5(3)	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 命中0/攻撃力+[Lv+7+5]/ガード値3/射程:至近の武器を作成								
影走り	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 戦闘移動。シナリオLv回								
砂の加護	3	3	オート	視界	単体	自動	-	
効果: ダイス+[Lv+1]個。ラウンド1回								
ライトスピード	1	5	マイナー	至近	自身	自動	100↑	
効果: メインPでXジャーを2回行う。その判定のC値は+1になる。シナリオ1回								
ダブルクリエイイト	1	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 《インフィニティウェポン》と組み合わせて武器を2つ作成。								
物質合成	1	5	Xジャー	至近	自身	自動	100↑	
効果: 2つの武器を選択して破壊。シーン間効果を合計したアイテム1つを取得し装備。1シーン1回								
万能器具	1	-	Xジャー	至近	自身	自動	-	
効果: その場にある物で日用品を作る								
折り畳み	1	-	Xジャー	至近	-	自動	-	
効果: 荷物いっぱい運べちゃうな								

5人家族で父母と小6の弟と小4の弟がいる。
 第2人はまだまだやんちゃな盛りで喧嘩ばかりしているのでよく仲裁に入っている。
 少しでも母の手伝いをしようと料理や洗濯、掃除など色々教わって取り組んでいる。
 部活動は中学生の頃に始めた剣道を高校でも続けており、部活帰りにおつかいを頼まれてスーパーで買ったネギを竹刀の様に手に直持ちしている光景をクラスメイトに目撃される事もしばしば。
 正義感が強く、以前に女性からバッグを引っ手繰って逃走する犯人を追い掛けて竹刀で勢いよく打ち付けて取り押さえた経験がある。

テンペスト=嵐、激しい暴風

PC①用ハンドアウト
 ロイス: 幸せな日常 推奨感情 P: 任意/N: 任意
 カヴァー/ワークス: 高校生/任意
 覚醒: 忘却

キミはA市に暮らすごく普通の高校生だ。
 キミは両親や兄弟と共にごくごく普通に、幸せに暮らしていたはずだった。その日までは。
 ある日、キミが学校の帰り道路地裏を通りかかると、悲鳴が聞こえた。
 恐る恐る近づいてみると、そこには振り返りを浴びた男が立っていた。
 命乞いをする人間をしり目に彼は刃をふるう。
 その瞬間キミは身に覚えのない情景を見る。
 かくしてキミの"日常"はいとも容易く終わりを告げた。